



県美大賞に選ばれた

宮川 英明さん

「まだ工芸家としては駆け出し。受賞は想像もしていなかった」。応募4度目でついで栄光に驚くが、過去3回は入選・入賞を果たした実力の持ち主だ。

銅鐸をモチーフにした硯は側面の曲線美にこだわった。「自然に直線はない。曲面を多くすれば人の気持ちも落ち着くと思っ

て」。一方で工芸品に不可欠な「用の美」としての緊張感も意識、墨を磨る部分は平面を追求した。菊池市出身。統合後の熊本高専の初代校長で、物理学が専門の工学博士でもある。硯工芸との出会いは「縁」だという。退職後の67歳の時、趣味の書を再開しようと硯を購入したが、説明書きと中身が違っていた。制作した硯士・小野寺去水さん（故人）の宇土市の工房を訪ねると、「作り方を教えようか」。丸3日通い、硯の世界に魅了された。

研究心がうずいたのだらう。インターネットで無形文化財保持者の作品を見て技を研究したり、硯に関する博士論文を入手したり。これまで18回挑んだ公募展では研究会にも出席し、プロに教えを請った。

材料となる石を掘りに長崎・対馬へ渡り、道具のノミも手作りする。完成形を思い描きながら砥石で磨く時間は「無の世界。2時間くらいすべにたつ」。途中で石が割れて落胆することもあるが「予期せぬ出来事は自分を成長させる」と向上心にあふれる。

伝統工芸諸工芸展でも上位入賞と今年は賞に恵まれた。「研さんを積み重ね、さらに硯の奥深さが見えてくるはず。少しでも伝統工芸士の技に近づきたい」

3人の子は独立し、玉名市で民生児童委員をしながら妻（68）と暮らす。73歳。（魚住有佳）

人  
ひと